

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年 10月 10日

| | |
|-------------|----------------|
| 派遣者氏名（専門分野） | 佐藤 由隆 （ 中国哲学 ） |
|-------------|----------------|

下記のとおり報告します。

記

| | |
|-------|------------|
| 研究テーマ | 懐徳堂学者の経学思想 |
|-------|------------|

派遣期間

2012年 9月 9日 ～ 2012年 9月 19日

| | 国 | 都市 | 訪問機関 | 受入研究者 |
|--------|----|----|---------------------|-------|
| 訪問研究機関 | 台湾 | 台北 | 国立台湾大学図書館 | なし |
| | 同上 | 同上 | 国家図書館 | なし |
| | 同上 | 同上 | 中央研究院 中国文哲研究所図書館 | なし |
| | 同上 | 同上 | 政治大学社会科学資料中心 | なし |

派遣先で実施した研究内容

報告者が現在大きな関心を持ち研究テーマと定めているのは、江戸期に隆盛した大坂学問所「懐徳堂」の学者の経学思想である。中でも、卒業論文に向けては、懐徳堂初代学主・三宅石庵がその講義の中で用いた「気拘物蔽」という語句について、その意味を明らかにすることを通じて、石庵の思想的立場を考察してゆくことを構想している。経書のうち、この語に出てくる「物」という字について詳しく言及しているのが『大學』である。同書中の「格物」という語句の解釈は朱子学と陽明学の間で大きく相違しており、その違いは両学派の思想の根本にも通じているように思われる。石庵は、朱子学を学んだのち陽明学にも傾き、諸学の良い点を柔軟に取り入れる折衷的傾向があったため「鶴学問」とも批判された人物であるが、「気拘物蔽」の意味等を解析することにより、立場の根底にも影響しかねない石庵の「物」観について明らかにすることができるのではないかと期待するものである。そこで今回の研究視察では、卒業論文に直接的に、ないしは間接的に関係してくる漢籍および研究論文の閲覧、収集を行った。

今回閲覧したものは大別して二種に分けられる。

一つはテーマに直接関連する善本あるいはその縮微資料（マイクロフィルム）である。国立台湾大学図書館の特蔵資料区では、善本である伊藤維楨『大學定本』の貞享二年本、縮微資料の清・陳世倌撰『大學集解』、明・林希元撰『四書存疑』を閲覧した。『大學定本』は、事前に参考にした『國立臺灣大學圖書館增訂善本書目』が貞享二年本としていたので、日本現存の正徳三年本との相違を期待したが、閲覧してみるとじつは正徳三年本であることが判明した。したがって、前記『善本書目』の刊記、および台湾大学図書館のHPの「臺灣大學圖書館館藏目錄 (TULIPS)」における記載は訂正を要するものと思われる。なお、特蔵資料区では善本のコピーや撮影は禁止されているようで、当該『大學定本』の入手は断念した。しかし、縮微資料は枚数に制限はあるがコピー可能であったため、他の二冊に関しては重要と思われる箇所のみ選択して入手した。中央研究院の中国文哲研究所図書館では明・王道撰『大學億』および『大學億釋疑』の縮微資料を

閲覧した。

もう一つは、テーマに関連する研究論文である。国家図書館では王麗華撰「大學之「格物致知」的研究：反省朱子、陽明的「格物致知」義」、政治大学の社会科学資料中心では蔡惠眞撰「伊藤仁齋反朱子學思想之研究」を閲覧し、そのコピーを入手した。後者については、論文を入手したことの他、インターネット上にて事前に閲覧の申請を行い、他の機関での閲覧方法とは違った手続きを踏んだことも非常に良い経験となった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今回の研究視察では、『大學』における宋学以降の思想家の「物」観を知り、「気拘物蔽」という語の出現の由来を知るために有益となりそうな資料を中心に、研究テーマに関連し、かつ日本では閲覧が困難であると判断した資料を主に調査した。結果、当初の目標として計画していた中で優先度の高かった文献にはすべて目を通すことができた。台湾大学特蔵資料区所蔵の善本については、非常に限られた部分しか入手できなかったことは誤算であったが、中国文哲研究所図書館にて、「気拘物蔽」の使用例として、日本では発見できなかった『大學億』を閲覧したことは非常に大きな収穫であった。研究論文については「大學之「格物致知」的研究：反省朱子、陽明的「格物致知」義」が、朱熹と王陽明の「格物致知」の解釈の違いを主軸としながらも、その解釈の変遷を宋学以前のものから王陽明以降の陽明学に至るまで幅広く取り扱っており、「格物致知」の解釈の変遷を捕捉するうえで非常に有益な手がかりとなると思われる。今後、この二文献を中心に精読し、「物」観の実態を把握し、同時に三宅石庵の立場も明らかにしていきたい。

派遣後の研究発表の予定

入手した文献を活用して卒業論文を作成する予定である。